

演歌の効用

コロナ禍で何とも長い期間、私どもは不安で抑鬱的な気分、生活を余儀なくされてきた。仕事を終えて、居間で一杯やりながらテレビをつけると、五木ひろしや八代亜紀などの名手が哀しく辛い歌詞と節回しの昭和の頃の歌謡曲を歌っているのに気づかされ、ついこれに引き込まれて時間を過ごしてしまふ。そういえば「演歌の花道」というかなり昔の歌番組を組み直して放映しているものまである。再放送で制作費が安いからそうしているという事情もあろうが、あの頃の哀しく辛いメロディーがコロナ禍の抑鬱の気分を慰撫する効果があることを制作者が知っているからではないか。

五木寛之さんのエッセイの中に「悲しいときには悲しい歌を」というのがある（『生き抜くヒント』新潮新書）。満州で終戦を迎えて凄絶の経験を繰り返した五木さんを慰めてくれたのは、「湖畔の宿」とか「サーカスの唄」とか「赤城の子守唄」といったセンチメンタルな、つまり哀しく切ない歌謡曲だったという。

渡辺利夫（公益財団法人オイスカ会長）

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任（二〇二〇年十二月、退任）。二〇一七年六月より現職。

コロナ禍の中であって人々を元気づけようと「上を向いて歩こう」を、一時あちこちのテレビが流していたが、いつの間にかやら聞かれなくなった。五木寛之さんのいうようにやっぱり「悲しいときには悲しい歌を」なのではないか。

自裁した母への深い哀切の思いを引きずりながら、ひたひた、ただひたひたと全国各地を歩き、生きて在ることの孤独と寂寥を歌いつづけた自由律句の俳人が種田山頭火である。私には、不安や抑鬱の時には、書架から山頭火の句集を取り出し付箋の貼ってあるページを開き、句のいくつかを読み進むというクセのようなものがある。墨染の法衣に網代笠をかぶって夕暮れの村々を歩く山頭火の後ろ姿が目の前に浮かんできて、私の心はいつの間にかやらほうと癒されていることが多い。「悲しいときには悲しい歌を」か。

ほろほろほろびゆくわたくしの秋

おもひでがそれからそれへ酒のこぼれて
死を眼前にした山頭火の句である。